

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 4 集

1983

宇治市教育委員会

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 4 集



平等院鳳凰堂の鳳凰像

1983

宇治市教育委員会

序

近年、宇治市では宅地開発等の大規模な開発が急増しているのに伴い、埋蔵文化財の発掘調査件数も増えてきました。

このたび刊行することとなりました『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第4集は、池森天神遺跡・八軒屋谷遺跡・寺山遺跡の3遺跡発掘調査概報をとりまとめたものです。3件の調査結果のうち八軒屋谷遺跡は本市の公共事業、他の2件は民間の開発事業に伴うものです。どれも、1カ月未満の短期間調査ではありましたが、それぞれ遺跡の概要が明らかとなりました。特に、事業者の方々には本市の文化財行政にご理解とご協力を賜り心から感謝いたします。

本書が多くの方々の目にふれ、埋蔵文化財に対する理解を深めていただくうえの一助になることを願うものです。

最後になりましたが、これらの調査ならびに整理作業等に献身的にご尽力いただいた方々や、本書の作成にあたりご指導・ご協力賜りました関係機関・関係各位に対し衷心より感謝の意を表します。

昭和58年3月

宇治市教育委員会

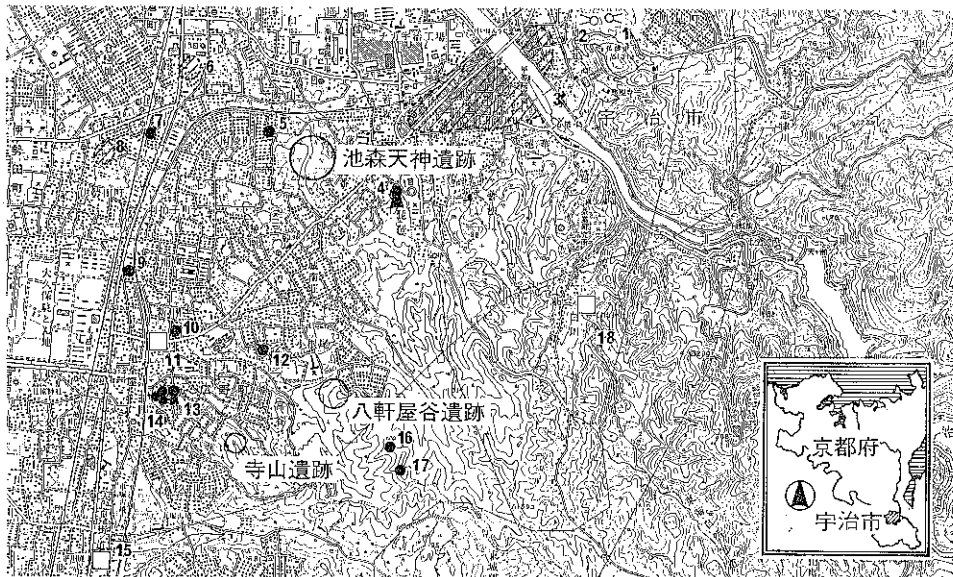
教育長 岩本昭造

凡 例

1. 本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第4集である。
2. 本書に収録した調査は、昭和56年度と昭和57年度とで宇治市教育委員会が実施した下記3件の埋蔵文化財発掘調査である。

調 査 名	所 在 地	実 施 年 月 日
1. 池森天神遺跡発掘調査	宇治市宇治池森・天神他	昭和57年3月15日～3月31日
2. 八軒屋谷遺跡発掘調査	宇治市広野町尖山3番地他	昭和57年8月9日～9月30日
3. 寺山遺跡発掘調査	宇治市広野町寺山17-123番地	昭和57年8月20日～9月4日

3. 本書は杉本 宏（宇治市文化財調査員）が編集し、整図・トレースは、上田和弘・猿向敏一・宝壁恭子・田中 康・奥田耕三が分担した。



1. 宇治瓦窯 2. 山本須恵器窯 3. 宇治市街遺路 4. 丸山古墳
5. 御廟古墓 6. 神楽田遺跡 7. 石のカラト古墳 8. 伊勢田神社遺跡
9. 伊勢田塚古墳 10. 一里山古墳 11. 広野廃寺 12. 庵寺山古墳
13. 坊主山古墳 14. 金比羅山古墳 15. 平川廃寺 16. 宇治一本松古墳
17. 一本松南古墳 18. 白川金色院跡

第1図 調査地周辺の主要遺跡分布図

目 次

1. 池森天神遺跡発掘調査概報	
1. はじめに	1
2. 調査の概要	1
3. 調査の成果	1
2. 八軒屋谷遺跡発掘調査概報	
1. はじめに	7
2. 調査の概要	7
3. 調査の成果	10
3. 寺山遺跡発掘調査概報	
1. はじめに	13
2. 調査の概要と成果	13
付載 宇治一本松古墳測量調査報告	15

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺の主要遺跡分布図

池森天神遺跡

第2図 トレンチ配置図	2
第3図 SX01実測図	3
第4図 SX01出土土器実測図	4

八軒屋谷遺跡

第5図 採集土器実測図	7
第6図 調査地区図	8
第7図 第1調査区平面図	9

寺 山 遺 跡

第8図 調査地位置図	14
------------	----

宇治一本松古墳

第9図 宇治一本松古墳測量図	16
----------------	----

図版目次

池森天神遺跡

- 図版第1 (1) 調査地遠景 (東から)
(2) A地点よりB地点を見る (東から)
- 図版第2 (1) A地点第1トレンチ調査風景 (西から)
(2) A地点第1トレンチ完掘状況 (西から)
- 図版第3 (1) B地点第6トレンチ完掘状況 (北から)
(2) B地点第3トレンチ完掘状況 (北から)
- 図版第4 (1) B地点S X01測量風景 (東から)
(2) B地点S X01完掘状況 (南から)

八軒屋谷遺跡

- 図版第5 (1) 調査地遠景 (南から)
(2) 第2・3調査区近景 (西から)
- 図版第6 (1) 第4調査区近景 (西から)
(2) 第1調査区完掘状況 (東から)

寺山遺跡

- 図版第7 (1) 調査地近景 (東から)
(2) 完掘状況 (東から)

1 池森天神遺跡発掘調査概報

例 言

1. 本報告は、池森天神遺跡発掘調査概報である。

2. 発掘調査組織は、下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会	
調査責任者	宇治市教育委員会教育長	岩本昭造
調査担当者	宇治市文化財調査員	杉本宏
調査事務局	宇治市教育委員会社会教育課長	堀喜代蔵
	同	係長 岡本茂樹
	同	主事 吉水利明
	同	主事 長谷川 暁子
調査補助員	岩本俊也，上田和弘，佐原 耕，田中 康，宝壁宣之	
調査協力者	宇治南陵台五社共同企業体，山田良三（京都府立城南高等学校教諭）	

3. 現地調査は、昭和57年3月15日より3月31日まで実施した。

1. はじめに

池森天神遺跡は、宇治市宇治池森・天神に所在する遺物散布地である。遺跡の発見は、当地域の開発に先立ち、昭和56年5月21日に京都府教育委員会より技師の協力を得て分布調査を実施したことによる。この結果、開発予定地内より古墳状隆起（蛇塚）1カ所と古墳時代から近世に至る土器の散布が確認され、池森天神遺跡と仮称し発掘調査を実施することとなった。今回の調査は、開発計画より除外されている古墳状隆起を除きその周辺部一帯を対象としている。

(吉水 利明)

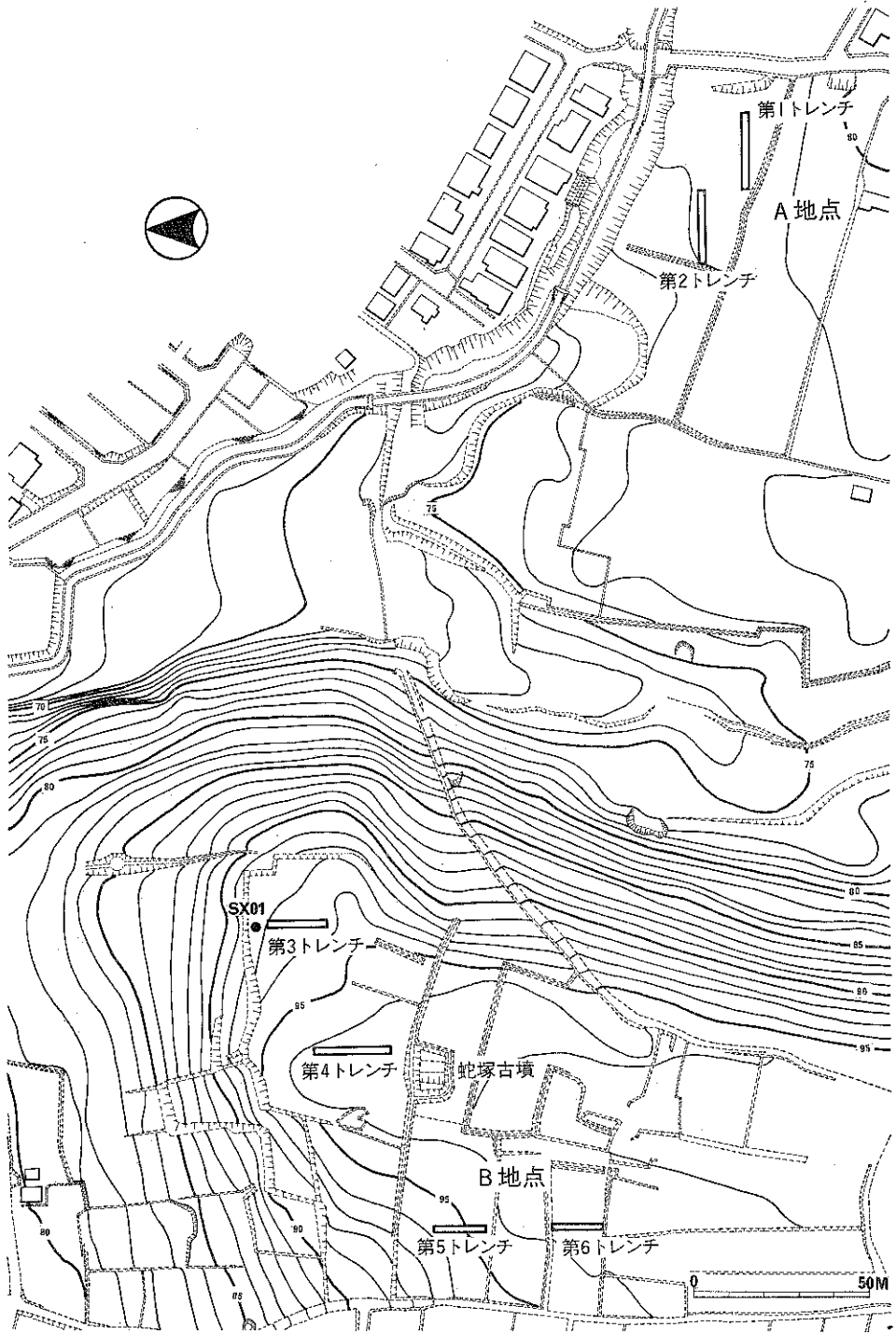
2. 調査の概要

トレンチは、高位段丘面上のA地点と、低位段丘面であるB地点とに幅2m、長さ15mを基本とし、第1～6までの計6本設定した。調査対象地全域を覆う竹の伐採をまって、A地点の第1・2トレンチの掘削を開始した。表土排除にはパワーショベルを使用し、あとはもっぱら人力によった。

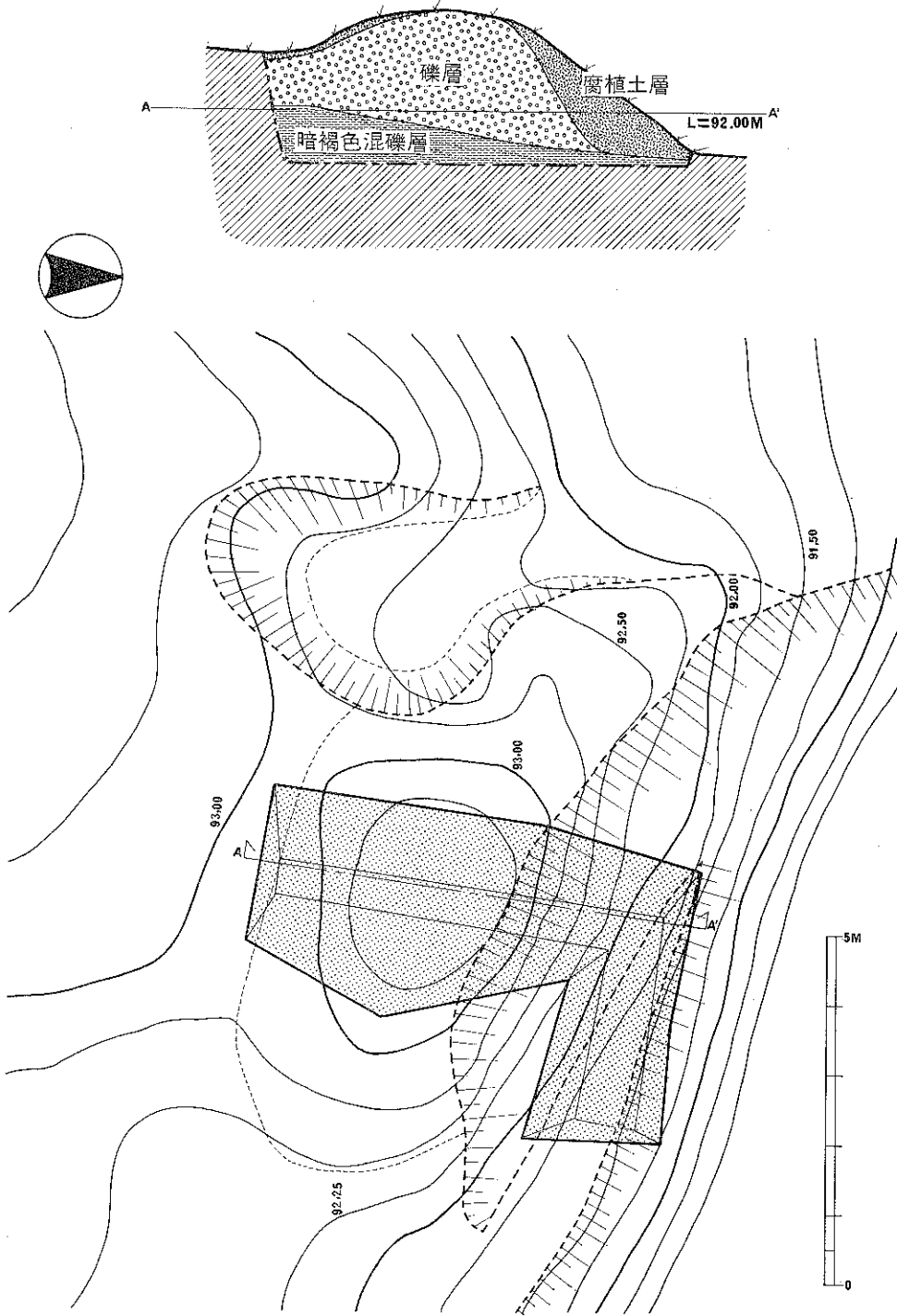
A地点に設定した第1・2トレンチの概要は、土層的に層厚0.2m前後の表土層下に層厚0.9m前後の暗褐色土が堆積しており、その下に赤褐色混礫土の地山が存在する。暗褐色土内よりは近世陶磁器が出土している。地山面で遺構追究を行ったが、遺構は検出されなかった。A地点の終了を待ってB地点の調査を開始した。竹林による土砂移動が少ないと思われる地点に第3～6トレンチを設定し、第3トレンチ北方に存在する小隆起にSX01の名称を与え、併せ調査した。第3トレンチは表土下に暗褐色土が0.4～0.8m前後堆積しており、その下にA地点と同様の地山が検出できた。第4～6トレンチは、表土直下ですぐ地山を検出した。遺構の追究は地山面で行ったが、第5トレンチで近世の落ち込みを検出した以外、遺構は存在しなかった。このような作業と並行してSX01の調査を行った。現状で古墓の可能性が考えられたので、現状測量後、「L」字形のトレンチを設定し作業を進めた。表面を覆う腐植土下はすぐに拳大の礫であり、SX01がこの礫により構築されていることが理解できた。したがってこの礫層の断ち割りを実施し、土層の観察を行うこととした。以上の行程を終了したのは昭和57年3月31日であり、同日をもって現地調査を終了した。

3. 調査の成果

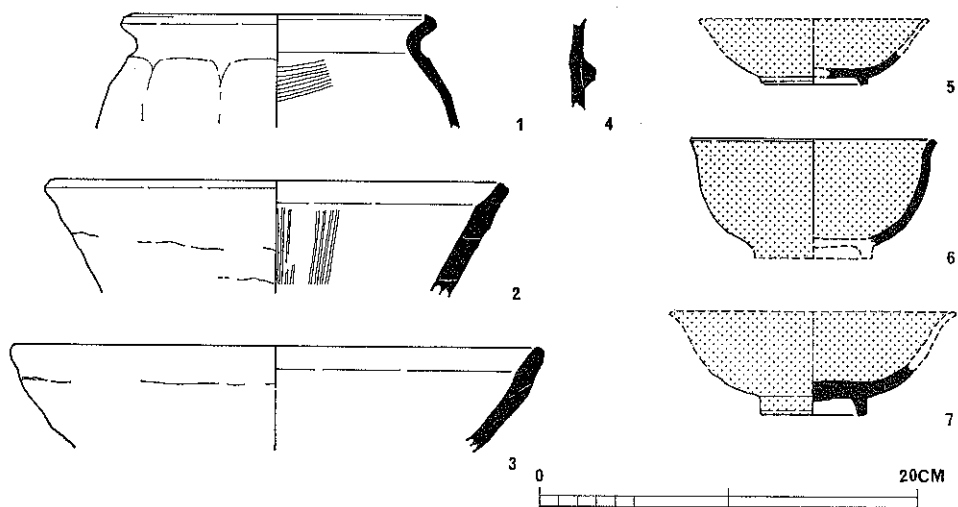
今回の発掘調査で検出した遺構は、SX01のみである。遺物についても近世陶磁器が大



第2図 トレンチ配置図



第3圖 SX01 実測図



土師器（甕：1，鉢：3）陶器（スリ鉢：2）磁器（椀：5～7）埴輪（4）

第4図 SX01出土土器実測図

半を占め、それ以前のは極めて少ない。以下SX01の概要をのべる。

SX01 第3トレンチ北方で確認した東西7m、南北4.6m、高さ0.7m程の楕円形隆起である。土層は大きく上・下の2層に分層できる。上層は拳大礫の層であり、下層は暗褐色土を混じえる礫層である。隆起は上層を主層位として構築されている。遺物はこの礫層中より出土しており、図化したものがその大半である。1は土師器甕であり、平安時代初頭に比定できる。4は埴輪片である。この2点が築造以前のものであり、以外は近世初頭に比定される陶磁器の類である。このことより、SX01が近世初頭に構築されたことを知り得るが、その性格については遺構遺物両者において特定でき得るものがなく、不明と言わざるを得ない。

以上、調査の概要をのべてきたが、当該地は、近世以前に一定の削平が行われているようであり、遺構的にはすでに消失している可能性が高い。しかし、出土遺物にみる古墳時代・平安時代の埴輪・土師器片等は、明らかにここで人々が生活活動を行ったことを示しており、今後周辺地域の調査の中でその実相は明らかになると考える。

(杉本 宏)

2 八軒屋谷遺跡発掘調査概報

例 言

1. 本報告は、八軒屋谷遺跡発掘調査概報である。

2. 発掘調査組織は下記のとおりである。

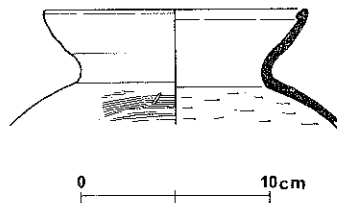
調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会教育長	岩本昭造	
調査担当者	宇治市文化財調査員	杉本宏	
調査事務局	宇治市教育委員会社会教育課長	小林巧	
	同 文化係長	伊藤忠正	
	同 主 事	吉水利明	
	同 主 事	長谷川曉子	
調査補助員	岩本俊也，奥田耕三，佐原 耕，田中 康		
調査協力者	㈱関西義組		

3. 現地調査は、昭和57年8月9日より9月30日まで実施した。

1. はじめに

八軒屋谷遺跡は、宇治市広野町尖山に所在する古墳時代前期の集落跡である。今回の調査は、南宇治第二中学校（仮称）建設に伴い、その予定地が当遺跡に西接しているため、工事に先立ち、遺跡の範囲確認を主眼とし試掘調査を実施することとなった。

当遺跡はすでに昭和29年にその一部が発掘調査^{注1}されており、古墳時代前期に所属する遺跡であることが確認されている。遺跡は、標高 120 mと80m前後の丘陵谷部を北流する小河川「名木川」の河原を中心として営まれており、標高63~70m前後の緩斜面である。遺構的には確認されていないが、出土遺物は所謂布留式土器が一定量出土しており、南山城地方における古式土師器の標式資料となっている。現在でも若干の土師採集は可能である。今回の調査地は、谷筋東側丘陵上である。



第5図 採集土器実測図

（吉水 利明）

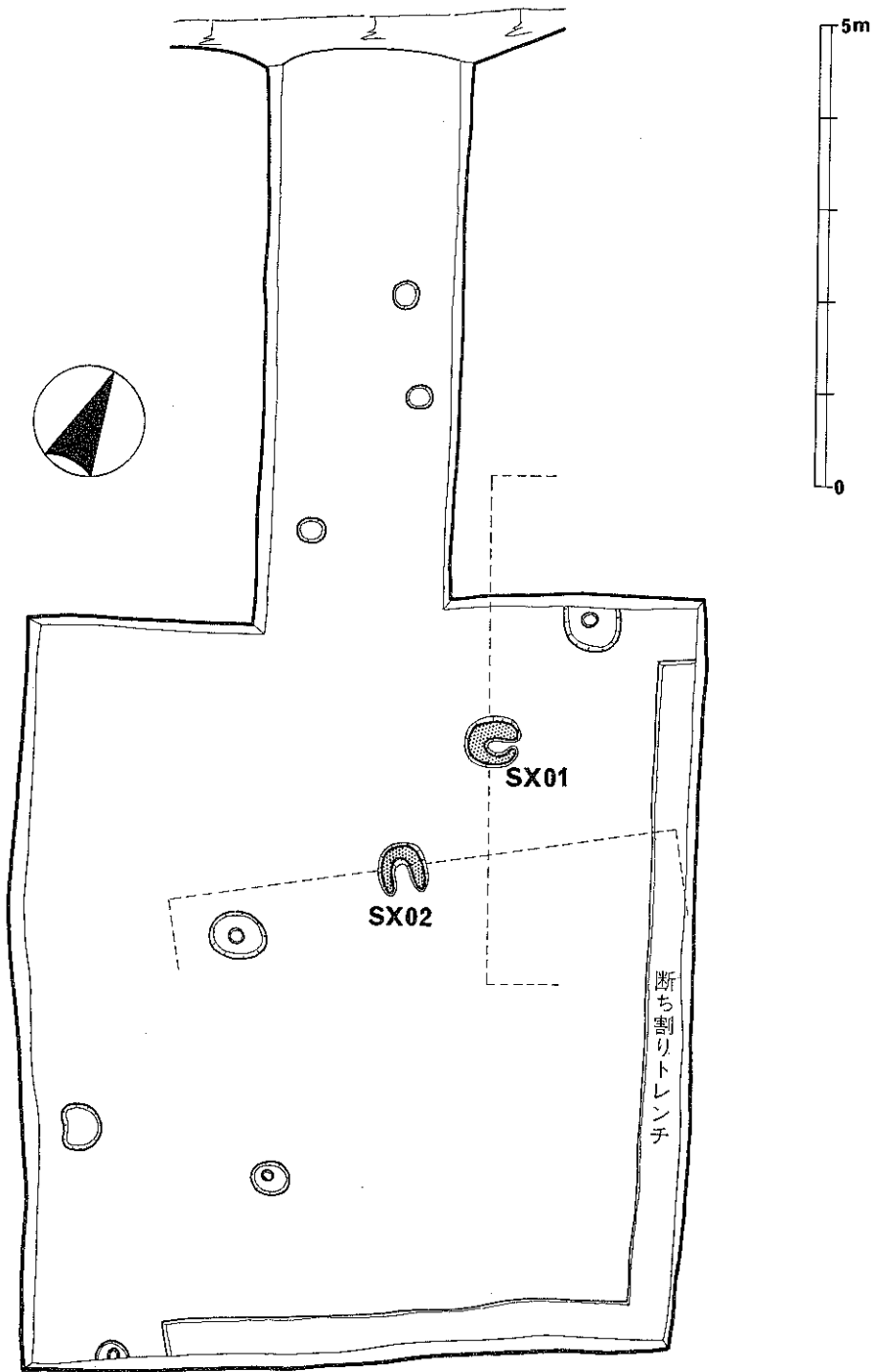
2. 調査の概要

調査地はすべて丘陵部であり、丘陵頂部を4の調査区に分け、それぞれにトレンチを設定した。トレンチ幅は2m、長さは30mを基本とし、丘陵に平行して設定している。伐採の終了をまって掘削を開始した。表土排除にはパワーショベルを使用し、その後はもっぱら人力によった。

標高 104.3mを測り丘陵最頂部である第1調査区では、地形的にトレンチ長14mと短いものとなったが、表土排除後、数個の柱穴を検出したため直ちにトレンチ拡張を実施した。ここで検出したものは、カマド状遺構残欠2カ所（SX01・SX02）と数個の柱穴であるが、それぞれ建物として復原し得ない。SX01・02とも削平を受けておりその一部を残すのみであり、これが竪穴住居に伴うものであるという確証は得られなかった。他の第2~4調査区では、表土直下はすぐに赤褐色粘質土の地山であり、遺構は検出されなかった。遺物についても、第1調査区で若干の近世陶磁器を採集したのみで、八軒屋谷遺跡に関連するものは出土していない。



第6図 調査地区図



第7図 第1調査区平面図

3. 調査の成果

以上のように、今回の発掘調査では、直接八軒屋谷遺跡に関わる遺構・遺物の出土はなく、わずかに第1調査区で時期不明の遺構を検出するに留まっている。したがって、八軒屋谷遺跡の範囲は、谷筋を中心とする部分に限られると予想され、比較的小規模集落であったと想定できる。

最後に、八軒屋谷遺跡の性格について若干ふれておく。当遺跡は、集落として劣悪な地理的環境に営まれていると言わざるを得ない。水稻栽培が可能な平野部へは直線距離にして約1.5～2.0km程離れており、かつ周辺はすべて丘陵地である。名木川も通常は河川というより小川と言った方がふさわしく、降雨時においては周辺の洪積土をまき込み、鉄砲水となって周囲を押し流すこともしばしばであったろう。地味もやせ、とても谷水田で経営できたと思えない。地理的には日常生活を行うことが不向きな土地なのである。では、なぜにそのような地理的劣悪さをおして集落がここに営まれたのであろう。この疑問に対して直ちにここで明言できないが、周辺の歴史環境より以下の推論もまた可能であろう。それは、当遺跡の東方丘陵頂に前期に比定される宇治一本松古墳^{注2}が存在し、そこまで尾根づたいに比較的容易に到達できることより、両者に有機的な関係を想定できることである。さらに言えば、宇治一本松古墳造営のベースキャンプとして八軒屋谷遺跡が成立した可能性である。厳密に言えば、宇治一本松古墳が布留式併行期であるか否かについては、なお留保しなければならないが、八軒屋谷遺跡の立地が一般集落と違う点、古墳時代前期の短期間集落である点、宇治一本松古墳との位置関係等より、上記可能性もあながち否定できないと考える。いずれにしろ、今後の調査をまって検討したい。 (杉本 宏)

〔注〕

注 1. 山田良三・石部正志「山城八軒屋谷土師遺跡調査報告」(『古代学研究』第34号, 昭和38年)

注 2. 山田良三「山城宇治一本松古墳調査報告」(『古代学研究』第42・43合併号, 昭和41年)

3 寺山遺跡発掘調査概報

例 言

1. 本報告は、寺山遺跡発掘調査概報である。
2. 発掘調査組織は、下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会教育長	岩本昭造	
調査担当者	宇治市文化財調査員	杉本宏	
調査事務局	宇治市教育委員会社会教育課長	小林巧	
	同 文化係長	伊藤忠正	
	同 主 事	吉水利明	
	同 主 事	長谷川暁子	
調査補助員	岩本俊也，上田和弘，奥田耕三，佐原 耕，田中 康		
調査協力者	京都マイホームセンター協同組合		

3. 現地調査は、昭和57年8月20日より9月4日まで実施した。

1. はじめに

寺山遺跡は、宇治市広野町寺山の丘陵上に位置する遺物散布地である。当該地の開発に先立ち、現地の踏査を実施したところ、丘陵上において若干の土器が採集され、かつ地形的にも平坦地が認められた。当地域付近は、上大谷古墳群を始め、坊主山古墳群、金比羅山古墳等の古墳密集地帯でもあり、当該地においても遺構の存在が想定できるところから事前の発掘調査を実施することとなった。(吉水 利明)

2. 調査の概要と成果

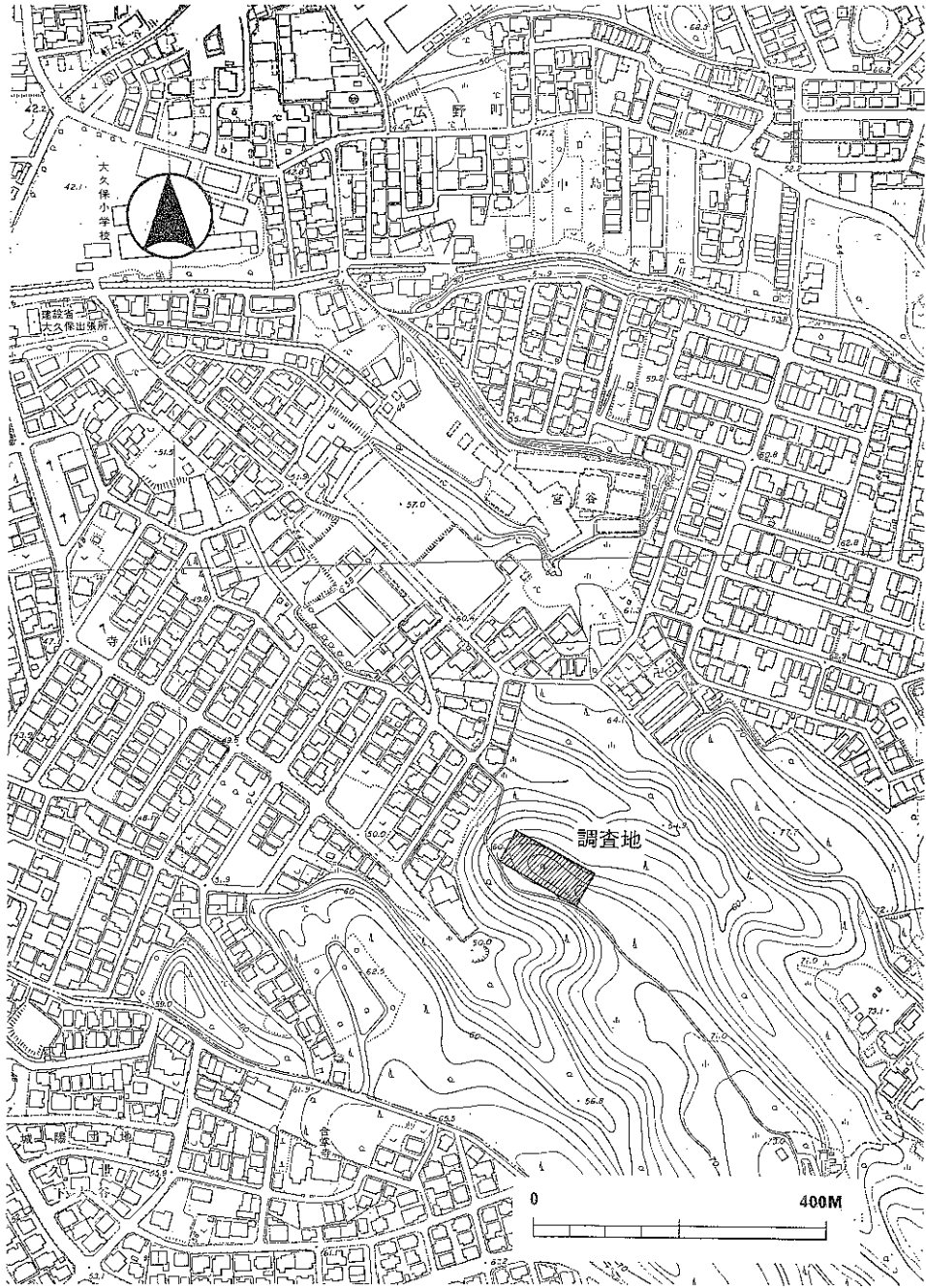
調査は、丘陵頂部平坦面に幅1.5m、長さ25mを基本とする「十」字トレンチを設定し遺構を確認することとした。丘陵上でもあり、遺構面までさほど深くないと予想されたため、最初より人力による掘削を基本とした。層厚10cm前後の表土を除去後、直ちに黄赤褐色粘質土である地山を検出した。地山面を精査し遺構の検出に努めたが明確なものは確認できなかった。

遺物には、古伊万里片が数片出土している。いずれも細片であり、原形を窺える個体はない。出土場所は、すべてが表土層中に含まれていたものである。

以上のように、今回の調査においては、遺構・遺物的には皆無に等しい状況ではあったが、当該地そのものは、城陽市に所在する総数26基からなる古墳時代前期から後期に至る大古墳群である上大谷古墳群^{註1}の対岸尾根上であり、なお付近にその関係遺跡が存在する可能性は強く、今後一層綿密な調査を必要とすると考える。(杉本 宏)

〔注〕

注 1. 岡本一土他「上大谷古墳群の調査」一試掘調査報告—(『考古学研究室調査報告』第1冊、(財)元興寺仏教民俗資料研究所、昭和52年)



第8図 調査地位置図

付載 宇治一本松古墳測量調査報告

位置 宇治一本松古墳は、宇治市広野町八軒屋谷の折居国有林内の丘陵最頂部に位置する古墳である。墳頂部からは、灌木により一部視界が遮断されるが、北西に京都盆地、南西に南山城盆地を一望できる。今回、墳丘測量を実施したので報告する。

過去の調査 当古墳は、昭和38年に山田良三氏によって発掘調査が実施され、その内容が明らかとなっている。以下報告にそって概要を説明する。また、墳丘については次項でのべるので、ここでは割愛する。

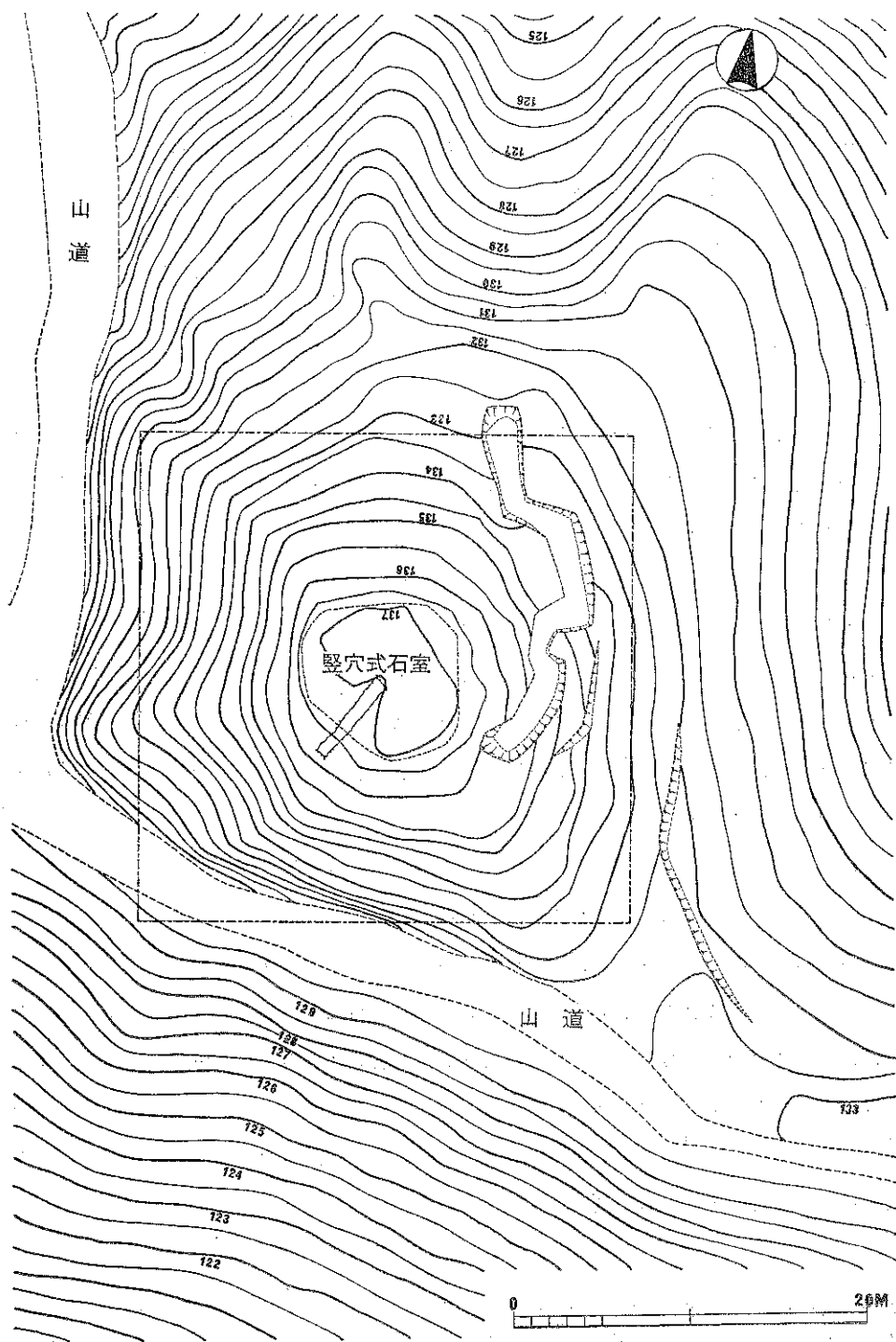
内部主体は、主軸をほぼ南北に置く竪穴式石室であり、全長532cm、最大幅100cm、高さ57cmを測る。すでに盗掘されており、側壁の一部が破壊されていたが、板石を木口積にして石室を構築している。石室の裏込めには栗石を使用している。石室底部には断面「U」字形の粘土床が検出され、棺には長大な割竹形木棺が使用されていることが理解できる。副葬遺物は、盗掘によりすでに大半が失われているが、棺外遺物として鉄製短剣一口、棺内遺物として袋状柄鉄斧1、鉈2、異形工具2、刀子形鉄器2があり、他に鏡片1と管玉2が出土している。外表施設は明らかでないが、埴輪片若干が出土しており、一部に埴輪使用が認められるとされている。また、二重口縁壺の破片も出土している。年代的には4世紀が想定されている。

測量の成果 報告によれば、径30～35m、高さ6.5mの2段築成の円墳とされているが測量の結果、一辺28mの方墳である可能性が指摘できる。墳丘西・南斜面は、自然流出による墳丘崩壊が認められるが、北・東斜面においては、一部破壊が認められながらも、コンターラインはほぼ直線的な動きをみせており、特に墳頂部付近のコンターラインは四方において同様な動きを顕著に認め得る。自然地形を有効に利用した古墳であるため、確言できないものの、現状の中では、一辺28m、高さ4mの方墳である可能性が高い。最近の中でも、上大谷古墳群^{注2}の中で数基の方墳が確認されており、当地方の古墳文化の中で、方墳の占める位置をあらためて見直す必要があるのではないだろうか。(杉本 宏)

〔注〕

注 1. 山田良三「山城宇治一本松古墳調査報告」(『古代学研究』第42・43合併号、昭和41年)

注 2. 岡本一士他「上大谷古墳群の調査」一試掘調査報告一(『考古学研究室報告』第1冊、(財)元興寺仏教民俗資料研究所、昭和52年)



第9图 宇治一本松古墳測量图